

盛唐（713―766）

初唐の三大家により楷書体が完成した後、次の盛唐では楷書よりも行書・草書に優れた書人（李邕など）が現れ、さらに中唐にかけて、くだけた草書である狂草が流行する。初唐より太宗の王羲之の崇拜により唐代の書法は、特に行草において王羲之が典型とされ、盛唐の玄宗の開元・天宝年間（713―756）は王羲之の書風が最も流行した。それらは唐代最盛期の文化を反映している。しかし、その多くは王羲之風の俗書であつた。王羲之の崇拜とその流行により王羲之の根本精神を見失い書法が形式化していくと、伝統を破壊しようとする反王羲之の新しい動きが出てきた。時代は中世の貴族社会体制がしだいに崩壊しだし、芸術にも革新の風が吹き始めてきた。

唐代は漢詩の最高峰の時代である。それらは『唐詩選』などでよく知られている。盛唐では中国史上最高の詩人といわれる李白・杜甫だけでなく、王維・孟浩然・岑参・高適・王昌龄などの偉大な詩人が活躍した。

李邕（675―747）李北海とも呼ばれる。江蘇省揚州江都に生まれた。若くして則天武后に仕え後玄宗皇帝に仕えた。

豪奢放縦で硬骨な性格のため、たびたび左遷されたり、事件を起こしたりし、最後は宰相李林甫に憎まれて鞭打ちの死刑になった。70歳であつた。彼は義を重んじ士を愛した。歴代の宰相に憎まれたのは、士人の間での厚い人望に対する嫉妬からだといわれている。李邕は盛唐の詩人でもあり、李白や杜甫と交際した。最初に杜甫を評価したといわれる。また文章がうまく能書であつたので高位高官の人々に人気があり、依頼され作つた碑文は800とも言われ、その謝礼で莫大な財を成したと伝えられる。現存しているのは十数種類だけである。碑も自ら刻したものが多いらしい。後世に大きな影響を与えたその書は、王羲之の法を基本にし、特に「集王聖教序」を学んで行書を得意とした。魏晉の書法を基本に新しい書風を作りだした。この行書の書風は人びとから好まれ、盛唐の文化を象徴している。後代の蘇軾や黄山谷や趙子昂などに大きな影響を与えた。代表的な書碑には、「李思訓碑」「麓山寺碑」「法華寺碑」「少林寺戒壇銘」「李秀碑」「東林寺碑」などがある。保守派。

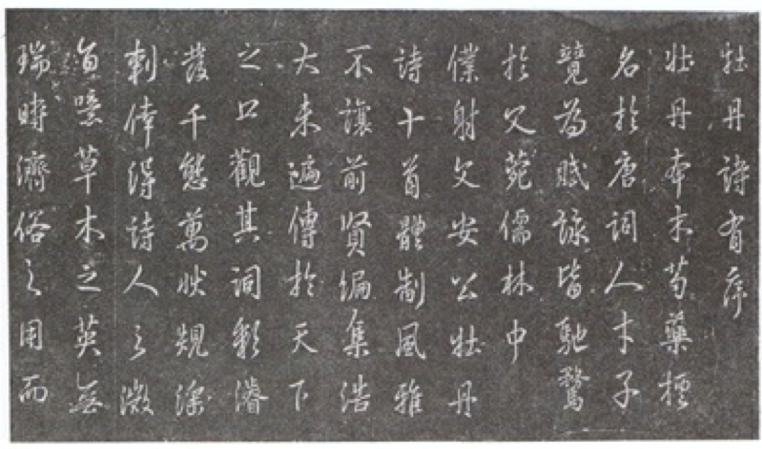
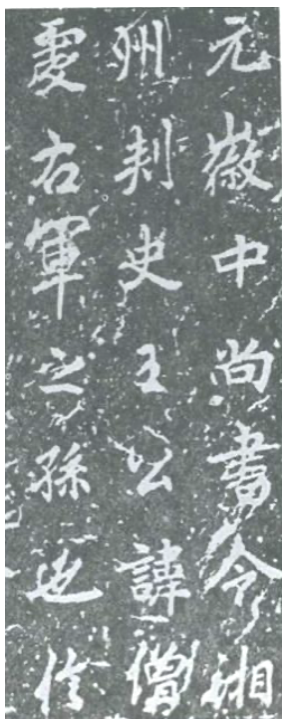
麓山寺碑（開元18年・730）53歳の作。筆力雄渾な筆勢で、

李邕の最もすぐれた行書である。28行、毎行56字。

字大約3cm。嶽麓寺碑とも呼ばれる。湖南省長沙の嶽麓書院に

現存する。撰文は李邕ではないようである。碑刻は李邕自身といわれる。

※「雄渾」・雄大で勢いのよいこと。よどみなく堂堂としていること。またそのさま。



李邕・「牡丹詩」

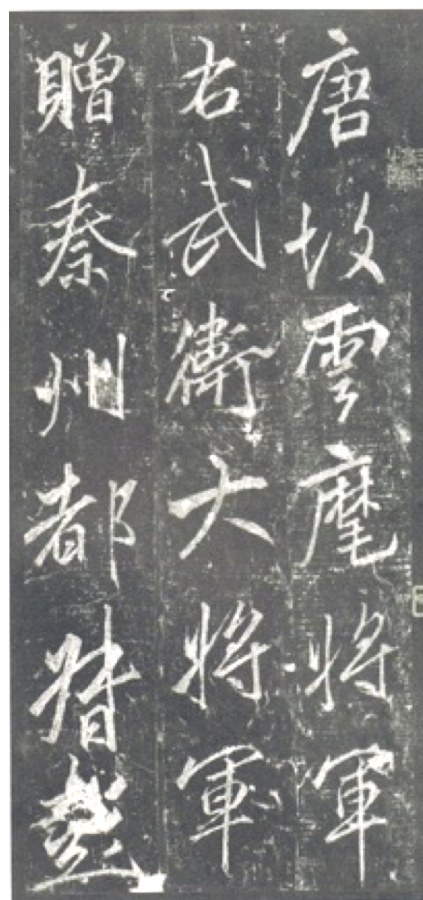
法華寺碑（開眼 23 年・735） 57 歳の作。行書碑。撰文も刻も李邕。法華寺の創建者の僧・曇翼の頌徳碑。原碑は亡

くなった。翻刻では、23 行、毎行 52 字。元の趙子昂が特にこの碑を珍重した。



李思訓碑（開原 27 年・739） 「雲麾將軍李思訓碑」が正式名。李思訓の頌徳碑。李思訓は唐の宗室の出身。北画

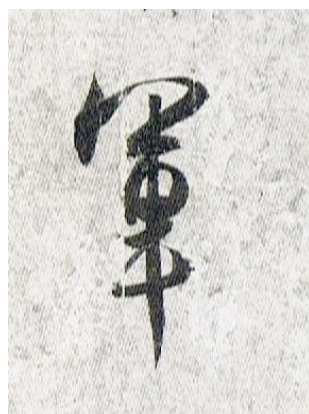
の祖といわれる画家である。李林甫は甥。王法を基本とした行書。字大約 4 cm。右肩上がりで縦長の字形が特徴で豪快奔放。李邕 61 歳以後の作か？碑高は 342 cm、幅は 145 cm。碑文は 30 行、各行 70 字、約 2000 字。陝西省蒲城縣橋陵に現存。



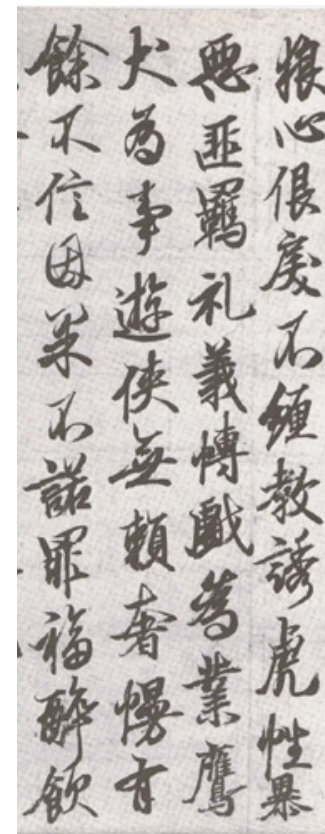
李邕の行書と王羲之の行書の比較



李思訓碑

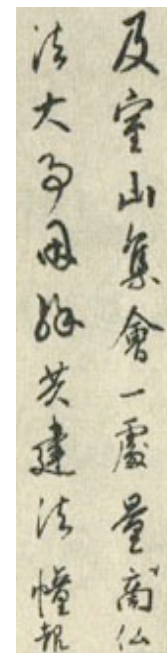


集字聖教序より

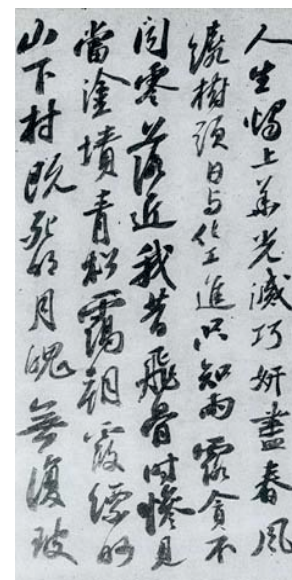


空海「聾瞽指歸」部分

高野山大門の大額の「高野山」の字はこれから集字された。李邕の書を日本に伝えたのは吉備真備であり、その子の朝野魚養が、その斬新な李邕の書を空海に教えたと思われる。王羲之と並んで李邕は和様漢字の基になっている。



空海・「風信帖」部分



蘇軾「李太白仙詩卷」(宋・1093)



趙子昂「張留孫碑」(元・1329年)

賀知章

(659—744)

会稽(浙江省)

の人。詩文、草書と楷書がうまかつたらしい。武則天、玄宗に仕えた。

84歳

のとき官を辞め、故郷に隠退した。酒好きで四明狂客と号し、張旭や李白らと交際し、自由に暮らした。杜甫の「飲中八仙歌」の冒頭で歌われている。

孝経

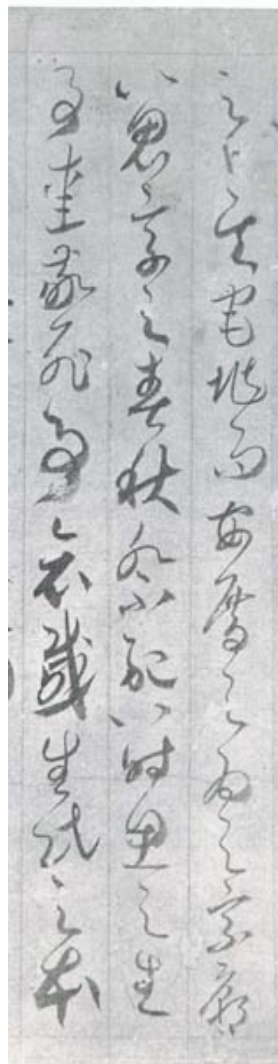
「草書孝経」ともいう。

古法(王法)から新法への過渡期の草書。

江戸時代中ごろ日本に渡来した。現在は

三の丸尚蔵館蔵。

※「孝経」…孔子の言動をしるしたという十三経のひとつ。孝道について述べている。



之。卜其宅兆。而安措(尸に昔になつてゐる)之。為之宗廟。事愛敬。死事哀感。生民之本(尽)……」

以鬼享之。春秋祭祀。以時思之生

古法と新法

古法とは二王の書法のことであり、新法とは顔真卿の書法のことであるとされるが、それが何であるのかについては諸説あつて明確ではない。新古の別はさておいて、この時代は中国書道史上最大の転換期である。張旭↓顔真卿↓懷素と継承された新しい書法は王羲之以来の草書法を革新するものであつた。張旭が創出した連綿草は懷素を経て日本に伝わり、かな連綿や良寛の書などを生み出している。また古法と新法の対立ではなく、王羲之↓褚遂良↓顔真卿という正当な流れとして書道史をとらえることも可能だと考えられる。

狂草の誕生（革新派） 唐代の芸術の転回

李邕が保守派の代表なら張旭は革新派の代表であり、芸術としての書の開拓者（先駆者）である。二王の書が形式化して本来の精神を失つてきたとき、伝統を破壊しようとする新しい動きが起つてきた。数百年来つづいてきた貴族社会を基盤として栄えてきた王羲之の書法や文学、芸術は貴族社会の崩壊とともに新しく変化して行く。

張旭（生没年不詳だが、開元・天宝時代の玄宗朝の人）字は伯高。張長史とも称される。吳郡（江蘇省）の人。後漢の張芝と同様、草聖と呼ばれているが、真偽不明の作品しか残っていない。李白、賀知章と親交があり、杜甫は彼の書の支持者であつた。杜甫の「飲中八仙歌」で歌っているように、酒豪で草書の名手であつた。大酔いし大声や奇声をあげて走りまわつて書をかいたと伝えられる。ときには髪に墨をつけて草書の大字を書いたり作品をつくることは、書だけでなく詩文や絵画をつくる作家の間に流行していたようだ。彼らは、師法に依らないで自然や現実には書法の発想を求めた。反王羲之的な革新的な書法を折釵股、屋漏痕、壁垢とよぶ。張旭は、これまでの書家と違つて、王羲之の権威を認めなかったが、しかし張旭は王羲之の法を基礎にした楷書をもつて狂草を書いた。李陽冰・顔真卿は門人である。

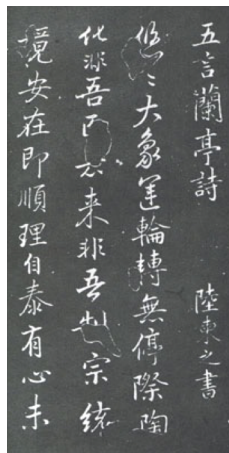
嚴仁墓誌

楷書 原石は52・5×52・5cm 全21行、各行21字、全430字 一九九一年河南省偃師県で出土。



※「今の世、草書を善くすと称するもの、あるいは真、行をよくせず。これ大妄なり。真は行を生み、行は草を生む。真は立つ如く、行は行く如く、草は走る如し。未だ、行、立をよくせずして走をよくするものあらざるなり。」（蘇軾・「東坡集」巻23より）

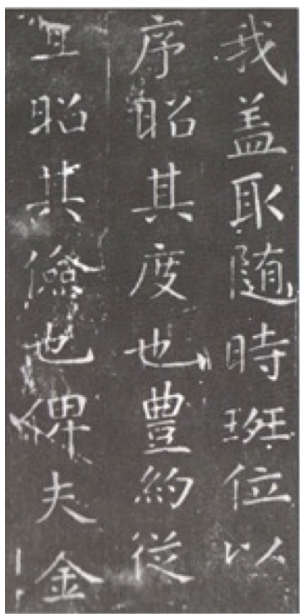
陸柬之「五言蘭亭詩」



郎官石柱記（開元29年・741） 楷書 「郎官石柱記」などともいう。

原石は現存しない。郎官に任命された人とその年月を記した序文。

※郎官・皇帝の身边警護などを勤める役人。

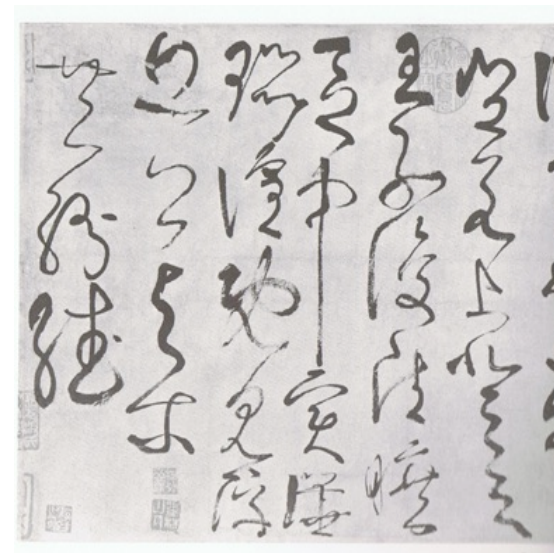


※張旭は虞世南の甥の陸柬之の子（？）の陸彦遠から「東之の書法」を授けられた。陸柬之は虞世南から書を学び、初唐の四大家と呼ばれることもある能書であつた。褚遂良と同時代の人。王羲之一家。

草書古詩四帖
そうしょこししじょう

(伝張旭)

狂草の名品。約29×約195cmの卷子仕立。5種類の色紙を継いだもの。遼寧省博物館蔵。



豈若上登天
王子復清曠
區中實譁
囂誼既見浮
丘公與爾
共紛繚

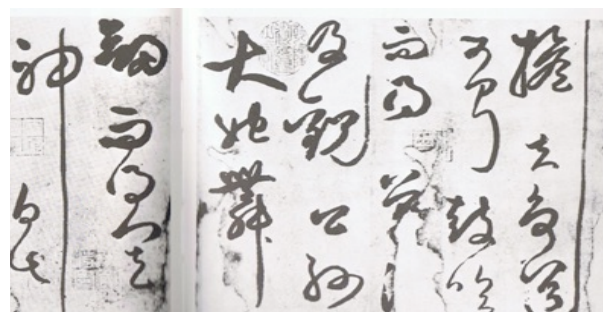
自言帖
じげんじょう

(開元2年・714)

伝・張旭

約60字からなる。

内容は自身の書風を創りあげた契機について述べたもの。王法による正統な草書体。



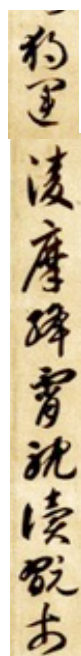
千字文
せんじもん

伝・張旭



(遊鵲)獨運凌摩
絳霄耽
讀翫市

游鯤は獨り運
り、絳霄を凌
摩す。耽讀して
市に遊び、



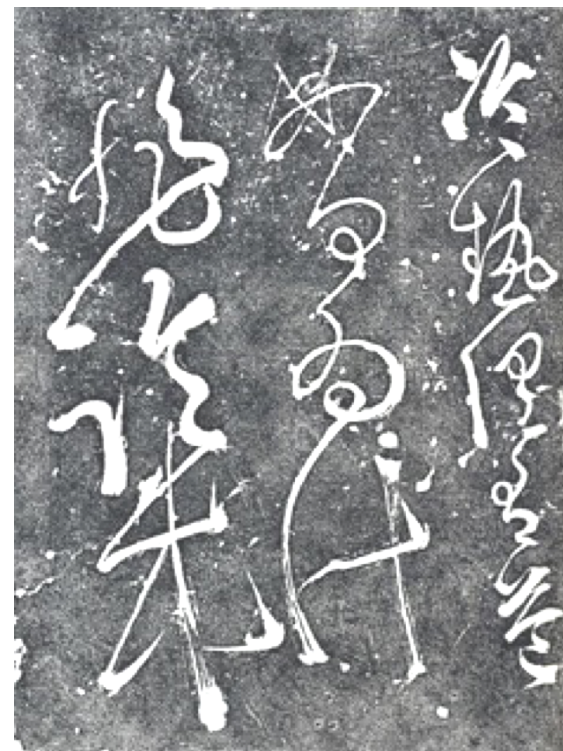
飛帛
ひはく

肚痛帖 とつうじょう

伝・張旭

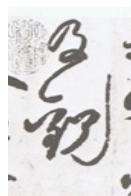
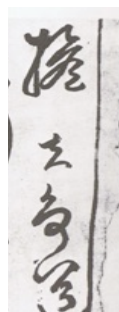
『淳化閣帖』

に刻入されているもの。部分。※淳化閣帖・

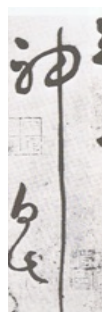


反王羲之書法の折釵股、屋漏痕、壁坼

折釵股とは 釵の股(柄)の形をとって書を書くことらしい。



屋漏痕とは



壁坼とは布置のことらしい。

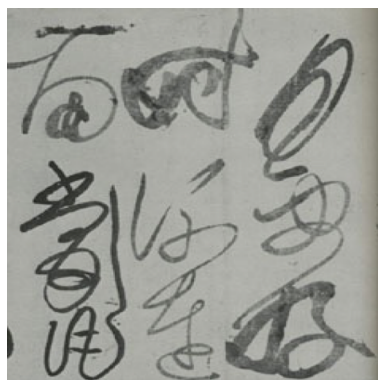
錐画沙とは砂に垂直に錐を立てて書くようにしっかりと力強く書くこと。藏鋒・中鋒の比喻か。

日本への影響



空海・「崔氏玉座右銘」

部分 々内含光



空海『性靈集』より 書の時間性。流れる時。自然の移り変わり。自然崇拜。

「取法四時、象形萬類。此為妙矣。」法を四時に取りて、形を万類に象るべし。此を以て妙と為す。

四季に連筆の法を則り、万物のさまざまな形象に文字の形勢を似せなくてははいけない。そうであつて、書の優れた表現とする。※四時（四季）・・・自然の生命力の創造作用。自然の運行の秩序。

王法（王羲之法）



「集字聖教序」より



王羲之「寒切帖」より



智永「真草千字文」より



王羲之「孔侍中帖」より



李邕「李思訓碑」より



欧陽通「道因法師碑」より

欧法





李邕「李思訓碑」より



欧陽通「道因法師碑」より



「顔勤礼碑」より



「孔子廟堂碑」より



「雁塔聖教序」より



「九成宮醴泉銘」より



転折とはね



顔真卿「顔勤礼碑」より



「九成宮醴泉銘」より



「雁塔聖教序」より



欧陽通「道因法師碑」より



智永「真草千字文」より



「孔子廟堂碑」より

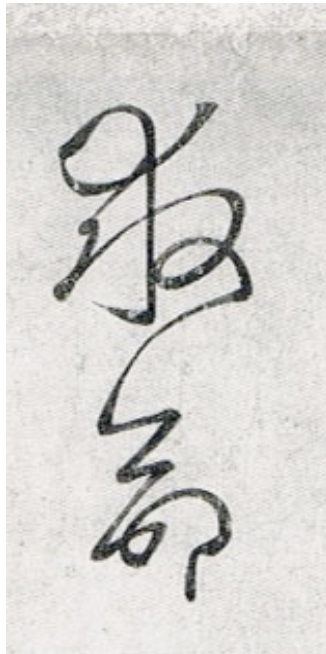
右はらい



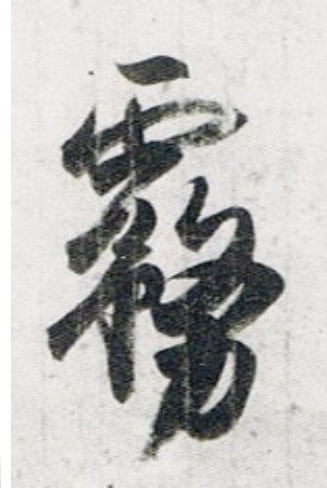
「李思訓碑」より「崇」



「李思訓碑」より「家」



王羲之「遠宦帖」より「求命」



王羲之「得示帖」より「霧」



王羲之「憂懸帖」より「憂」

結構法



「九成宮醴泉銘」より



背勢と向勢